

■研究調査レビュー

皆村武一著『戦後奄美経済社会論』を体験的に読む

前利 潔 (知名町役場)

池田勇人首相が所得倍増計画を打ち出した1960年、私は沖永良部島に生まれた。63年、皆村教授は沖永良部高校を卒業し、鹿児島大学に入学。皆村教授は、初めて島を離れ、鹿児島港に着いたとき、おびただしい物資が島向けに積まれていたのを目にし、「島は自給自足社会だと思っていただけに驚いた。この物を買うお金はどこから出ているのだろう」と疑問に思ったことが、経済学の道を志すことにつながった、という(南日本新聞「かお」欄、98年1月4日)。そのまなざしは、本書の基底に流れているテーマでもある。

私が沖永良部島という「世界」しか知らなかった60年代から70年代、皆村教授は国際経済学の研究者としての道を歩みながら、故郷である沖永良部島の、そして奄美の島々の経済社会の変容を、みつめていたはずだ。

学生生活を終えて(83年)、島に帰ると、「開発」が進んだ島の姿にとまどいを覚えた。子供の頃、よく遊んだ砂浜は、海岸防災林造成事業の名のもとに造られた護岸によって、とても砂浜と呼べる姿ではなくなっていた。集落を下っていくと共同墓地がある。墓地といっても、墓正月(1月16日)、墓盆(8月15日)には一族がその墓地に集まり、先祖を迎えて宴を開くなど、島の人にとってはまるで花見をする公園みたいな場所だ。その墓地からアダン林をくぐりぬけると、まっ白な砂浜があり、その向こうにはサンゴ礁のイノー(内海)が広がっていた。集落、墓地、アダン林、砂浜、イノーは一体となって、シマ空間を形成していた。ところが、護岸によって、集落とイノーは切断されてしまった。はじめてこの光景を見たときは、さすがにめまいを

感じた。同時に、子供の頃のシマ空間が大きく変貌していることに気がついた。

「開発」とは、いったい何のためにあるのか、という疑問がわいてきた。その疑問に対する手がかりとなったのが、皆村教授が『奄美近代経済社会論』を出版したあと、精力的に発表していた戦後奄美経済社会について論じた論文である。本書は、それらの論文を加筆・修正したうえで、体系的にまとめている。

本書から、私が小学校から高校時代を過ごした60年代から70年代にかけての奄美経済社会の姿をまとめてみる。日本「復帰」(53年)から10年が過ぎた60年代前半になると、米の生産量は郡民消費量の7割を自給できるまでに回復していた。当時は、農作物の大部分を、サトウキビ、甘藷、米で占めていた。60年代半ば頃まで、海、山、田畑の産物といった地域資源に恵まれ、生活物資の自給率はかなり高かった。

60年代は、復興事業による公共投資、そして日本経済の高度成長の影響が奄美にも及び、奄美社会の近代化が著しく進展した時代でもある。週に3~4回程度、1,000トン未満の船が就航していた航路が、65年頃には1,500トン級の船がほぼ毎日、そして航空機も就航するようになった。70年代に入ると、5,000トン級の船の時代となる。復興・振興事業による雇用機会の増加、社会保障や政府の財政移転等による、賃金や所得の上昇は、奄美の人々の消費水準を高め、整備された交通網を使って、食料品をはじめ大量の生活物資が移入されるようになった。

61年の大型製糖工場の操業と、69年の米の生産調整は、奄美諸島の農業及び就業形態

に大きな変化をもたらした。大型製糖工場の進出によって、農業部門に相対的過剰な労働力が形成され、その一部は大型製糖工場、土木建設業、サービス業に吸収されたものの、その多くは島外へ、激しい人口流出となって現れた。食料事情の改善とサトウキビ生産奨励によって甘藷耕作面積が減少し、サトウキビ耕作面積が増加した。69年以降の米の生産調整によって、水田も大幅に減少した。これまで自給的状态にあった米は移入に依存するようになり、80年代に入ると、水田はほとんど姿を消してしまった。

この時代の私の記憶をかさねてみたい。小学生の頃は、まだ集落に小型動力の製糖工場と、水田があった。小型製糖工場では、黒砂糖(含蜜糖)をつくっていた。製糖期になると、できたての黒糖の甘い香りが漂ってきた。その小型製糖工場も、いつのまにか操業をやめ、廃屋になっていた。小学校からの帰り道には、水田地帯が広がっていた。水田地帯の水路に笹舟を流しながら、家路についた。寝床につくと、水田地帯から、カエルの大合唱が聞こえてきた。70年代に入ると、いつのまにか水田がなくなり、カエルを見ることも少なくなった。皆村教授が、「いまの島の子供たちに、糲穀を見せても、それが何なのかかわからない」と言っていたことを思い出した。

公務員の家庭で、祖父母、両親、7人兄弟という大家族の中で育った。黒豚とヤギも飼っていた。搾ったヤギの乳を、親戚の家に配るのが僕の役目。子ヤギとは、楽しく遊んだ。母は、ソテツの実(ヤナブ)から味噌をつくっていた。小学校の運動会でも、玉入れ競争の玉は、自給(ソテツの実)だった。春には山に行き、タケノコを取り、塩漬けにして、一年中食卓に出ていた。母は、タコ獲り名人でもあった。サンゴ礁のイノー(内海)に行くと、あっというまに、タコだけではなく、ウナギや魚介類を獲った。子豚と小ヤギは島内消費に出荷されていたみたいだが、それ以外は

家庭内で消費するためのものだ。

69年、沖永良部空港が開港。子供の私にとっては、本土との物理的な距離よりも、精神的な距離を縮めてくれたような気がする。その年、「真夜中のギター」でレコード大賞新人賞を受賞した沖永良部出身の歌手、千賀かほるが、空港に降り立ったときのことを鮮明に覚えている。テレビで見る「世界」が、目のまえにあらわれたのである。そして、それまで船で運ばれ、2、3日遅れで届いていた新聞が、飛行機で運ばれるようになり、その日の内に届くようになった。

中学校、高校時代の記憶には、牧歌的なものはほとんどない。高校生になると、ロックバンドを結成し、卒業間近まで、バンド活動をしていた。水田が消えていったのは、その頃だが、ほとんど関心がなかった。学生生活を終えて島に帰ってきたときに、子供の頃の原因風景にある水田がなくなったことの喪失感に気づいた。皆村教授は「水田の消滅は奄美の経済社会のみならず、環境に及ぼした影響は甚大といわざるをえない」と書く。

本書のサブタイトルは「開発と自立のジレンマ」となっている。奄美において、「開発と自立」の問題をジレンマとして受けとめている人は、どれくらいいるのだろうか。

90年代初めのゴルフ場開発をめぐる議論の中で、開発推進派は「ゴルフ場ができれば観光客(宿泊客)が増え、地元農産物への需要が伸びる」と主張した。地元農産物の供給体制がどれだけあるのか、ということは問われない。保徳選挙が激しかったころ、某代議士は国政報告会の場で、奄美の人々が納めている税金の何十倍もの予算を獲得していることを訴えた。私はその代議士に、「その予算で実施される公共事業の所得効果はどれだけですか」と質問をしたが、答えることができなかった。

本書によると、奄美における投資乗数効果(所得効果)は「0.2以下」である。開放度

(外部依存度)が高い奄美経済においては、建設資材や賃金によって購入される食料品やその他の関連物資のほとんどが郡外から購入されているので、1,000億円の公共投資があっても、郡内では200億円の所得効果しかもたらさないという。農産物の供給体制については、名瀬中央青果市場への島内からの野菜の搬入量は約半分であるが、直接鹿児島や産地から直移入している大型小売店(ダイエー等)の存在を考慮にいれると、「名瀬市の青果物の自給率は20%程度になる」と分析している。

「(経済的)自立」というと、「自給自足」という誤解もある。「自給自足」は「ほとんど不可能」であり、島嶼は「他地域との相互依存関係をもたなければ存続できない宿命」にある、ということを確認しておく必要がある。問題は、外部依存を強めつつあることだ。大島紬やサトウキビなどの産業が、比較優位性を失いつつある現在、新たな比較優位産業または生産資源を創出しなければ奄美経済は衰退を余儀なくされるだろうと、皆村教授は言う。

黒糖焼酎は、移出用製造品としても、そしてまた郡内消費用製造品としても大きな経済的効果をもっていると、皆村教授は指摘する。黒糖焼酎は酒税法において奄美地域だけに認められたものだが、原料となる黒糖の大部分を沖縄及び外国から移入している、という現実がある。そのことを、ほとんどの島の人には知らない。含蜜糖(黒糖)をつくっていた小型製糖工場から、分蜜糖をつくる大型製糖工場への転換という国策が背景にある。「黒糖焼酎の原料となる奄美産の黒糖(含蜜糖)に対する補助金を沖縄並にし、原料の黒糖を地元」で供給できる制度が必要だ。戦後の糖業政策、そして黒糖焼酎については第8章で詳しく論じられている。

「あとがき」において、「開発と自立のジレンマを克服し、開発と生態系の調和を図って

いく」ためには、「奄美の価値を再認識」することが必要だと説く。これまでの開発の目的は、格差是正であった。格差是正論は、「本土並み」という言葉に象徴されるように、価値基準を「本土(日本)」に置く。価値基準を「本土(日本)」ではなく「奄美」に置きなおせば、格差是正論では「負」として認識されていたものが、「正」として再認識されることもある。

ゴルフ場開発をめぐる、推進派から「アマミノクロウサギは百害あって一利なし」という主張があった。アマミノクロウサギは、「負」として認識されている。ところが、世界自然遺産という視点からみると、それは「正」として再認識されることになる。もっとも、世界自然遺産に対する奄美側の受けとめ方をみると、これまでの価値基準の置き方を転換させているわけではない。国によって評価された奄美の「価値」を、無批判的にうけ入れているにすぎない。奄美におけるゴルフ場開発を、「価値」あるものとしてうけ入れた精神構造と、まったくかわっていない。

私自身の経験を紹介しよう。20代の頃までは、ロックとクラシックばかりを聴いていた。島唄に価値を見いだすことはできなかった。島で、ベンチャーズ、ウィーン・フィルメンバーによる弦楽合奏団、ワルシャワ室内オーケストラなどの公演も実現してきた。しかし、ロックとクラシックだけでは満たされない自分に気づくようになった。96年、当時の自治省の外郭団体「地域創造」の助成を受けるかたちで、島唄のメロディーと沖永良部島の創世神話を素材にした、ワルシャワ室内オーケストラによるクラシックCDを企画制作した。波の音と、湧き水の音も収録した。いまではそのときどきの気分にあわせて、島唄、ロック、クラシックを聴く。島唄の価値がわかるようになったからこそ、ロックもクラシックもさらに楽しく聴くことができたようになった。今度は、三線と波の音、湧き水

の音だけでCDを制作してみたい。

奄美自身に価値基準を置きなおして、「本土（日本）」を、そして「世界」を再認識すると、新たな可能性がみえてくるはずだ。そこから、「開発と自立のジレンマ」を克服するための道が開けてくると思う。



CD「沖永良部の交響詩 創世神話“島建シンゴ”」（東芝EM株）の湧き水の音を収録した「瀬利覚集落のホー（湧き水）」